

四季彩便り

2015・初夏

発行人
光が丘 4-11-2
漢方四季彩堂
酒見 裕子
(092)927-2693



たのしみは

四月中旬、まだ花冷えの残る朝、はおつた上着の襟を立て、いつものように弥生の丘を歩きます。見上げれば新緑をたたえた桜並木、視線を足元に移せば地面を覆う深い紫色の花。

開花を心待ちにしていたキラソウです。

聖徳太子が定めたという冠位十二階位の最高位の紫色とはこんな感じだったのだろうかと思いを巡らせ、しばし見入りました。

実際には最高位の深紫色はムラサキ(紫草)の根を使って染めたのでしようが。

そして思い出したのが幕末の歌人、たちばなのあけみ橋曙覧『独楽吟』の和歌

たのしみは 朝おきいでて 昨日まで

無かりし花の 咲ける見る時

まさにこの心境です。

もう一首

たのしみは 意にかなふ 山水の

あたりしづかに 見てありくとき

お金や名声を無用とした生き方の純粹さに胸を打たれます。

薫る風に吹かれ、山笑う景色を眺め、ツバメの飛来に初夏の訪れを感じ、万物が成長するこの季節を満喫しながら今日も歩きます。



古典に学ぶ

日々の生活を楽しむ

貧しく身分の低い人でも、正しい生き方を人の道とし、それ自体を楽しんで生活していくことができれば、大きな幸せである。そうであれば、一日を過ごすあいだも、ずっと楽しみを味わう時間が多いことになるだろう。まして、一年を過ごすあいだは、四季折々、このような楽しみが一日だけにとどまらず続くのである。

このようにして、一年一年を積み重ねていけば、日々の楽しみは末永く続き、その結果、自然と長寿になるのである。我ら貧賤なる輩やからは、「知者の楽しみ、仁者の寿じんしゃ いのちながし」には及びがたいが、楽しんで生活して長寿に至る過程は、似たようなものになるう。

(注)「子曰く、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静なり。知者は楽しみ、仁者は寿し」『論語』雍也第六

『口語養生訓』貝原益軒原著・松宮光伸訳注

一日一日を楽しむことによって長寿を全うする。当たり前のことのように、実際には難しいときもあるかもしれないが、楽しむことを心がけていきたいと、この文章を読んで改めて思いました。



折々の薬草

牡丹

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」とは古くから美女を表すたとえ。

初夏の庭をひとときわ豪華に色どり、観る者の心まで華やかにしてくれる、そんな魅力を備えた牡丹は中国が原産のボタン科の落葉低木です。中国でも牡丹は花の王「花王」「富貴花」などと称されています。

日本へは千年ほど前に渡来し、薬用として寺院に植えられたようです。

約二千年前に編纂された中国最古の薬用書『神農本草経』に「頭痛を治し、悪血を散じ、血脈を順ならす」と記されています。

日本の書物に初めて登場するのは「ほうたんの名で『枕草子』に記載があるのだとか。原種は紅紫色の花ですが、交配が盛んに行われた結果、花の色も多彩になり、江戸時代には栽培手引書まで出版されるほど人気を博したそうです。

薬用に用いるのは根の皮、「牡丹皮」で、特に婦人病の処方に配合されています。

月経不順や月経痛に使用する「桂枝茯苓丸」

「温経湯」、視力回復に役立つ「杞菊地黄丸」などの処方知られています。

